

伊賀越道中双六

初代 吉田玉男／談

森西真弓／記

〈出典『吉田玉男 文楽藝話』日本芸術文化振興会、平成19年9月〉

「沼津」は戦前から人気狂言の一つで、私が入門した頃、人形では初代榮三師匠の呉服屋十兵衛、文五郎師匠のお米、玉次郎師匠の雲助平作という配役が定番でした。浄瑠璃は三世津太夫さんと綱造さんのコンビがたいへん結構でした。後に山城少掾さんも語っておられますけど、声柄からいって、「沼津」は津太夫さんのものでしたね。

私は玉次郎師匠の弟子でしたから、最初は平作の足を持つのが普通のように思われるかもしれませんが、おじいさんでもあの役の足は難しいのですよ。老人ですので、膝を曲げて姿勢を屈めたままでよたよたと歩く。平作では、特に“小揚”と呼ばれる冒頭の場面で、十兵衛の荷物を持ってよろけたりするでしょう。そのため元気に歩いては駄目なんです。入門したての若手に持たせるのは、老人でも動きの少ない役で、平作のような仕どころの多い役には、経験を重ねた足遣いが配されます。

その後、平作の役には門造さんが回られるようになり、私は榮三師匠が遣われる十兵衛の足を持たせてもらうようになりました。晴天の東海道を旅する十兵衛は、手拭を頭に乗せ、煙管をくわえて、景色を眺めながら楽しそうに軽快に足を進めます。ここは人形も足遣いも、その陽気でうきうきとした気分を出すのが大切です。そのためには足をあまり強く踏まないようにするのがポイントですね。煙管は道中用の小ぶりのもので、口許の方が平らにしてあって、人形の口にひっかけられるようになっている。実際に煙も出る仕掛けになっているのですよ。

戦争を挟んで初めて役で持ったのは池添孫八で、昭和二十四年十月の帝国劇場、翌二十五年四月には四ツ橋文楽座で勤めています。十兵衛は二世榮三さん、平作は玉助さんに代わっていましたが、お米はやはり文五郎師匠でした。孫八は出番も少なく、それほど汗もかきませんので、すぐ帰れるよう先に楽屋風呂へ入ってから舞台に出たら、ほてって赤い顔をしていたらしく、幕袖で出を控えている時、文五郎師匠に「玉男、お前、酒を飲んでいるのと違うか」と疑われてしまい、師匠の顔にハーッと息を吐きかけて「飲んでまへん」と証明したのも、今となっては懐かしい思い出です。

昭和二十年代、「岡崎」が出ると和田志津馬も持ちましたし、「沼津」では三十七年一月道頓堀文楽座（後の朝日座）と四十七年四月朝日座でお米を勤めています。もちろん文五郎師匠写しです。この場面では貧しい身なりをしていますが、前身は吉原で全盛を誇った傾城の瀬川なので、それを感じさせるだけの、そこはかとない色気の描写が求められる。クドキで「私ゆえに騒動起こり」とある通り、また、十兵衛が平作のボロ家へやって来るのも、途中で出会ったお米の美しさに惹かれてのことですからね。

十兵衛の初役は昭和三十九年十月朝日座です。この時は「沼津」だけでしたけど、四十二

年三月の国立劇場では通し上演され、その時も十兵衛を勤めました。「沼津」だけでも、十兵衛は遣っていて気持ちのいい役ですが、通しで出るとさらに役の性根が首尾一貫し、町人ながらも立派な行動を取る人物像が明確になる。また、「沼津」で重要な役割を果たす小道具の印籠を、なぜ十兵衛が所持していたのかも「円覚寺」が出ることによってはっきりします。

“小揚”は先ほども言ったように明るい気分で遣いますが、“平作内”になるとだんだんと深刻な展開になっていきます。平作の身の上話を聞くうち、まず十兵衛だけが目の前にいる貧しい老人が産みの親であり、お米が実の妹であることを知る。守り袋の件りでは、真実を知った驚き、さらには何とかして貧苦を助けてやりたいという思いを表現する。ここは座ったまま、煙草を吸うしぐさ、吸殻をはたく動き、懐へ手を入れて思案する様などを重ねていきながら、気持ちの揺れを見せます。

出世した息子に今さら頼っていつかは人の道が立たないという律儀な父親に、どうすれば金を手渡すことができるのか。十兵衛が考えついたのは、お米に惚れた振りをして、嫁入りの支度金として託すことでした。「面目ないが最前から、わしゃこなさんに惚れたわいの」と十兵衛がお米にしなだれかかるところ、私、ここが足修業をしていた子どもの時分から好きでねえ。栄三師匠に憧れて、楽屋でツメ人形を持ちながら、先輩の吉田玉丸さんをお米に見立てて真似してたくらいです。

懐手して右肩を落とし、色気を湛えながら遣うのですが、栄三師匠がなさると、何ともしなやかでええ格好でね。本興行以外の公演などで他の方が遣われるのも見せてもらいましたけど、首の持っていきよう、肩の使い方など、栄三師匠とは全然違う。常々、若い者たちに、いいものも悪いものも見ておくことが大事だ、と言うのはこういうことです。どこがどう違うのか、プロとして見極める目を持つことが肝要です。

その後いったん寝入った後、お米が印籠を盗もうとする騒ぎがあつて、平作親娘と十兵衛が敵味方の関係（お米は和田志津馬の女房、十兵衛は志津馬の敵沢井股五郎に由縁の者）にあることが明らかとなる。話はさらに入り組み、十兵衛の立場も複雑になります。父と妹を助けてやりたいが、正面きっては出来ないの、今度は石塔寄進を理由に金子と臍の緒書を預け、わざと印籠を忘れて旅立つ。出発の前に亡き母を思って仏壇に手を合わせるのも、さりげないけれど、いい場面です。

“千本松原”では最初、平作が敵の在り処を教えてもらおうと十兵衛の袖に縫りついてくるので、右、左、とそれを振り払い、どうしたものかと腕組みして思案する。「親の心を察しやり」では手拭で涙を拭いますが、ここは、まだ互いの立場や面子を重んじて、印籠を拾ったこととして志津馬に傷の養生をさせるよう勧める。ところが、平作が十兵衛の脇差を自らの腹へ突き立てたのを機に、物語は急展開を迎えます。

雨が降り始め、胡弓の哀切な音色が流れる中で、平作が必死の懇願をするのを聞きながら、十兵衛は道中合羽を脱いで平作に着せ掛け、さらに笠を平作の頭上にかざして、雨を凌いでやる。親が子を案じ、子が親を思いやる。心もきれいなら、形も美しく極まる、「沼津」最

大の見せ場です。事ここに至っては十兵衛の気持ちにも迷いはありません。初めは平作の耳に口を近づけて、さらには忍んでいるお米と孫八に聞かせるため、笠を左頬にかざして大きな声で股五郎の潜伏先を教えるのです。

その後、「親子一世の逢い初めの逢い納め」で二人が顔を寄せ合い、遂に父子の名乗りとなります。最後は松の木の脇に立ち、右手に持った笠で顔を隠しながら、十兵衛が泣いている様を見せ、キザミの柵で幕となる。

十兵衛は、武士にも劣らぬ気概の持ち主であるだけでなく、情も深い。通しで出ると、後半の「伏見北国屋」で、今度は妹お米のために命を投げ出す。首は二枚目に用いる源太ですけど、この役は思案する場面が多いので、ネムリ目で、眉の動くものを使います。他には『仮名手本忠臣蔵』の「山崎街道」から「身売り」までの早野勘平にも用いる。つまり、単なる美男ではなく、苦勞を知っている、大人の役なのです。

平作も情理を兼ね備えたい役で、昭和四十四年五月、NHKのテレビ放送用に一度だけ持ったことがあります。玉次郎師匠の平作が、拵えを感じさせない自然な役づくりで、いかにも平作らしい雰囲気があり、味のある舞台でしたので、それをお手本にしました。「沼津」で経験のないのは荷持ちの安兵衛だけです。

「沼津」は地味ながら、武家社会の慣習だった仇討に巻き込まれ、親子兄妹が敵味方に別れるという運命の皮肉に翻弄されながらも、立派に生きて死んでいった町人たちの姿を感動的に描く、実によく出来たお芝居です。十兵衛には、“小揚”“平作内”“千本松原”、それぞれに仕どころ、見せ場がある。本当にやり甲斐のある、遣っていて気持ちのいい、好きな役の一つです。(後略)